



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人間のからだの現代的形成と平和教育の課題：女性史を手がかりに
Author(s)	阿知良, 洋平
Citation	社会教育研究, 34, 75-90
Issue Date	2016-06-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62302
Type	departmental bulletin paper
File Information	75_achira.pdf



人間のからだの現代的形成と平和教育の課題 ―女性史を手がかりに―

阿知良 洋 平*

目 次

1. 課題と方法	75
2. 殺し殺されることへの麻痺	76
(1) 社会的に媒介された殺人	77
(2) 再帰的近代化とからだの形成	79
3. 女性史におけるからだの読解と平和	80
(1) 森崎和江の略年譜	80
(2) 第1期：植民地朝鮮で失った肉体労働の感覚	81
(3) 第2期：強姦の衝撃と自然固有の世界の発見	82
(4) 第3期：いのちの精神史と科学技術への警鐘	86
(5) 小括―からだと平和の思想	89
4. 生のリアリティへ―まとめにかえて	89

1. 課題と方法

平和をめぐる最近の状況において、「二重語法」はその問題の特徴を示す用語となった¹。平和の概念は戦争で人間のいのちが奪われることを歴史的には含まないはずであるが、現政権をはじめとして今では、人間を殺す戦争を含んだ状況をも「平和」と呼んでいる。筆者はそのような内容を平和の概念に含むことは人権の人類史的到達点から不可能と考えるが、「二重語法」という状況がなぜ生じてしまうのかを考えることは、現在の平和問題を深く理解するうえで重要だと思っている。

戦後日本の平和教育は、戦争の悲惨な実態に対して悲しみや怒りを覚えることを前提にして、平和の価値の獲得を論じてきた。しかし、テロ組織の人々や自衛官の死を前提とした「平和」が一定数以上の市民の政治的賛同・許容・無関心を得ているなら、すでにその前提は崩れていると言わざ

* 室蘭工業大学

¹ 日本平和学会編『平和研究』42号、2014、早稲田大学出版会、ii頁。

るを得ない。直接的には、悲しみや怒りが発生しない状況がある。だとすれば、平和教育の新しい枠組みが必要となっているといえる。本稿の課題は、その枠組みを組み立てる上でのポイントがどこにあるかを仮説的に整理することにある。

そのために、本稿ではからだ²の感覚に焦点を当ててみようと思う。「二重語法」が、からだの感覚の空洞化によって可能になっていると思われるからである。つまり、殺し殺されることに対する、少し前なら当たり前と思われてきた人間の感覚が当たり前でなくなっていることが、「二重語法」成立の条件になっていると思われるからだ。空洞化というとニュアンスに違和感があるかもしれない。個人のからだの側に問題を矮小化してしまいそうだからだ。むしろ、殺し殺される状況を含んだ今の世界以外の、ありうる世界像が全く見えないがために、あらざるを得ないその世界の強烈な刺激を受け止めきれずにシャットダウンしてしまっているとでも言ったほうが、個人のからだと社会との関係を含んで捉えられるかもしれない。からだの感覚の空洞化は、からだの外側の社会との関係で捉えるべきだろう。

からだの感覚のおかしさに異議を唱えることに大きく貢献してきたのは、女性史だったと言っていいだろう。『青鞥』の堕胎論争³や田中美津の社会運動への違和感⁴などが思い浮かべよう。からだの感覚のおかしさを語ることばは、その時代にはうまく存在していない。にもかかわらず、彼女らは想像を絶する生みの苦しみを経て、ことばを紡ぎ出してきた。本稿では、ゆらぐ平和ということばをもう一度私たちのいのちの尊厳を守る方向で確たることばにしていこうための方法論を、女性史に学んでみたい。

2. 殺し殺されることへの麻痺

近年の殺人事件では、多くの人が理解しがたいような動機もみられる⁵。無論、個人の心身の特徴もあるだろうが、それが他人を傷つける方向に作用してしまう意味で、社会的な問題も含まれていないだろうか。

² 本稿では肉体とからだとを区別して使用している。論を進めるなかで述べるが、先に述べておけば、肉体は個体完結的な捉え方、からだは外界とのつながりを含んだ捉え方である。

³ 『刑法と善悪とは別問題です。しかし刑法に触れば罪人だという事は知っていました。(中略)』と答えましたの。するとなぜ自首しなかったのでしょうか？『罪を認めているものは法律で私ではなかったからです』原田皐月「獄中の女より男に」堀場清子編『『青鞥』女性解放論集』1991、岩波書店、268-269頁。

⁴ 「ゴーマンさは百も承知で、しかし、百姓の生きざまのツメの垢でも我が身に胎むことを抜きに、百姓の生きざまの凄さのまえに、尾を振るのも、巻くのもイヤだった。そういうゴーマンさを持たねば、何がしかの宿泊代を払って、『援農』させてもらって、そして取れる農作物は百姓の倉へ、という支援闘争の構造の中で、おそらく空転していく自分しか見出せやしないと、『直感』したんだ。その軍門に下ることを最初から了承して行くような、そんなお人好しな行き方、そんないいかげんな、『三里塚』との出会いは、どうしてもイヤだった。」田中美津『いのちの女たちへ』新装版、2001、パンドラ、237頁。

⁵ 一例として、「人を殺してみたかった」朝日新聞 2015年1月28日朝刊、39面。

(1) 社会的に媒介された殺人

私たちはしばしば、A が B を殺害した現象に対して、その責任を A に帰して社会的な解決として
いる。しかし時折、A のみに責任を帰すことに違和感を覚えることがある。本当に A 個人の責任に
してしまっているかわからなくなるときがあるからだ。近年みられるような、介護の疲れによる
殺人などは、殺人が正当化されることはあり得ないとしても、そこまで辛い状況に追いこまれたに
もかわらず「面倒を見るのは当然家族の義務だ」といった社会規範を全うしなければならない矛盾
をその動機の中に感じる。

その感覚があるとき、A はなぜ殺人に至ったかを、物欲や怨恨等 A 個人の動機を超えて社会的に
追求する問いが生まれる。中島岳志は、2008 年の「秋葉原事件」に即して追求した。犯した罪の償
いの問題は当然あるとしても、明らかになったのは、殺人を実行する際の自暴自棄の感覚に至らし
めるまでの彼の社会的境遇の複雑さと重さだった。中島は丁寧にプロセスを追うことでそれを確か
めた。社会の側の要因を強調するとき、世間からは「我慢が足りない」と犯人に責任を持たせるこ
とばが発せられるだろう。しかし、この「我慢」なるものを要請する社会的まなざしそれ自体が、
現代の戦争を許容するからだの形成と関わって重大な問題をはらんでいる。

周知のとおり、米海兵隊の新兵訓練施設を通称「ブートキャンプ」と呼ぶ。新兵訓練の初期には、
からだへの暴力的な教育が特徴的といえる。なぜ暴力的かというと、髪をすべてそれられる等の強
制的な肉体改変、それまでの慣習を一切捨て軍隊式の規律の生活リズムを確立する、それらへの拒
否に暴力的なことばで服従を迫るなどの教育方法がとられるからである⁶。これによって形成される
のは、命令に従う人間である。言い換えれば、主体性を奪われ、自身の行為に責任をとれない人間
の形成である。ここでは意志の力が奪われ、命令に従う肉体のみが存在する。こうした肉体の形成
によって戦場での殺人が可能になる。しかし、からだは外界（人間関係、自然との関係）と関わり
ながら自律的に生命を循環させるものであるから、命令に従い辛さを我慢することは、体内に矛盾
を引き起こすことがある。それらが極限にまで高まることで、軍隊内での自殺や退役後の心的外傷、
生活の崩壊がもたらされたりする⁷。

なお、殺人事件と戦争とを同列に扱えないだろうが、からだへの負荷と他者への攻撃性の発露と
いう視点からは連続してとらえることができる。むしろ、昨今の状況を踏まえれば、連続させて捉
えるべきだろう。経済的徴兵制が現実味を帯びているため、日本社会での生きづらさといわゆる「イ
スラム国」への米国を中心とした攻撃とは、個々人の生活のレベルでも密接な関連を持ってきてい
るからである⁸。

以上を踏まえると、私たちは、からだを暴力に慣れさせることによって、他者への暴力に耐えら

⁶ 詳しくは、藤本幸久監督映画作品『ONE SHOT ONE KILL』2009、森の映画社を鑑賞頂きたい。

⁷ 堤未果『ルポ 貧困大国アメリカ』2008、岩波書店、139-141 頁。

⁸ 布施祐仁「日本でも『経済的徴兵制』がしのび寄る」『月刊社会教育』2010 年 5 月号。

れるからだをつくっている。それは、秋葉原事件では意図的に形成されたものではなかったが、結果的に共通している。自分の辛さを暴力によってしか他者に伝えられないという現象が起きるのは、生きてきた環境において緩慢な暴力を受け続けてきた結果であろう。佐貫浩は、「2008年6月の秋葉原事件は、社会から無視、無用視され、誰からもつながりを断ち切られた孤独の無念と社会へのうらみ、そこから発する死への願望を、社会への復讐として、社会に記憶させる形で実現しようとしたものととらえることができるかもしれない。しかしすでに多くの子どもたちは、もう十年以上もそういう追いつめられた状況におかれ、いじめや登校拒否や自殺や他殺を実行しているのではないか。その意味ですでに子どもたちは、『戦場』に取り囲まれている」⁹と言っている。事件としてのものも、戦争におけるものも含めて、殺人は、われわれのからだを暴力に慣れさせる社会の力に媒介された現象なのである¹⁰。自殺においても同じことが指摘できるだろう。自殺は迷惑をかけなければ批判されることは無い点で、殺人との悲しい違いを持っているが、自分を殺せる自分のからだ形成された結果である点でここまでの議論と共通している。

暴力に慣れるからだの社会的な形成は、暴力を直接担う者のみならず、それらを傍観し許容する多くの一般の人々にも共通していることを忘れてはならない。身近な問題では、教室のいじめが指摘できる。いじめにおける傍観者層の存在が、いじめの存立に深く関わっていることが指摘されてきた¹¹。世界史的な問題でも傍観者の存在がむごく人を傷つけていることがある。アジア諸国にアジア太平洋戦争の犠牲者がいるにも関わらず、物質的に豊かで平穏な暮らしをしている日本人は、その痛みを無視することで彼らを苦しめて続けた。1970年代からの北海道の民衆史掘り起こし運動は、日常を生きる傍観者としての私たちが「痛み」を思い出さなければならないと指摘してきた。なぜ「痛み」を感じられないからだ形成されてきたのか、それを明らかにして、そのからだを乗り越える学習論が必要だといえるだろう。

からだを見るうえでは、自然とからだ（それも自然の一部であるが）との関連を視野に入れて、社会的規範による精神的ストレスの側面からだけではなく、栄養の循環の側面からもからだはより根深く「開発」されている側面も見逃してはならない¹²。例えば、私たちの食生活は、免疫系に影響を与え、アレルギーを誘発し、外界と不安定なかかわりしか保てないからだを形成している。そして、自分のからだの自律的な生命の循環を維持するのに多くの労力を割かなくてはならなくなる。これは食生活の側面からの一例であるが、外界と不安定なかかわりしか保てないからだを進行すれば、他者や社会に対する想像や改革のための行動に割ける余力が小さくなるため、現状肯定

⁹ 佐貫浩『平和的生存権のための教育』2010、教育史料出版会、114頁。

¹⁰ 田中美津の次のことばも思い出される。『『犯罪』にもいろいろあるから全てそうだとは言いきれないが、しかしその名で呼ばれるものの行為のほとんどは、いま痛い人間が、そのとり乱しぶりを極限の形で表現したものに他ならない。逆にいえば、この世においては、とり乱すことは悪なのだ』。田中美津『いのちの女たちへ』新装版、2001、パンドラ。181頁。

¹¹ 森田洋司『いじめとは何か』2010、中公新書。

¹² 関連して、ヴァンダナ・シヴァ著、浜谷喜美子訳『緑の革命とその暴力』1997、日本経済評論社。

的意識が醸成されやすくなり社会を批判的に捉え作り変えていく勇氣は生成しにくくなる。私たちのからだは、栄養の循環や免疫系の次元を含めて、暴力を発したり許容したりする方向に「開発」されているといえる。

教育・学習論と関わっては、生活指導研究において竹内常一がこの次元を含めて暴力の問題を捉える必要を述べてきた。竹内常一は、不登校の子どもたちが訴える身体症状に着目し「かれらの心身は自律神経系・免疫系・ホルモン系のからだのトラブルに悩まされ、脅かされるようになっていくのです。(改行) そうした観点からみると、いまの子どもたちは、ちょうど自然が公害によってその生態系を破壊されているように、ヒューマン・ネイチャーのまさに『ネイチャー』自体が危機にさらされているといっているのではないかと思うのです」と、子どもたちのからだの問題を、自然の循環に対する暴力の問題として把握していた¹³。私たちは、近代化の中で、銃や戦車、原爆や水爆といった道具(対象)の側の開発によって、人間の死をより簡単に大量にもたらす方法を開発してきた。しかし今や、人間のからだの側の「開発」によっても、戦争がもたらされようとしている。

(2) 再帰的近代化とからだの形成

社会の暴力性を読み解く学習において、からだや自然のことを含めて捉えなければならない理由は、社会そのものの性質の変化にある。

ここで参考になるかもしれないのは、ウルリッヒ・ベックの危険社会論であろう。ベックの『危険社会』では、現代における自然を次のように捉えている。「最も重要な結論を言おう。経済、政治、家族、文化といった部分システムからなる社会は、近代化の進展によってもはや『自然から独立した自律的な社会』として捉えることはできない。環境問題は社会の外側の問題ではなく、徹頭徹尾(発生においても結果においても)社会的な問題なのである。(中略) 自然科学が『自然』として取り扱っているものは、社会の内部に文明化の過程で引き入れられた『第二の自然』である」¹⁴。私たちの身の回りの自然は、すでに人間によって加工された存在になっていること、つまり、一見私たちの社会の外側に位置するように見える自然も、人間社会の事柄であるかのようにみえる戦争ともはや無関係には存在していないというのである。自然がどうあるかも、戦争が起きるかどうかと深く関わっているのである。ということは、人間の自然であるからだも、その在様如何で、戦争遂行の力も発揮すれば、戦争を止める力も発揮する二重性を帯びた存在となる。

そして、戦争を許容するからだが存在し、その戦争というものが「生命の自然基盤に対する脅威と破壊として現れる」¹⁵というのである。テロの標的としての原発事故や核兵器の使用などをみても生命の自然基盤に対する脅威は納得がいく。このように暴力を許容するからだの存在が、殺人でき

¹³ 竹内常一『教育を変える－暴力を超えて平和の地平へ』2000、桜井書店、227頁。

¹⁴ ウルリッヒ・ベック著、東廉・伊藤美登里訳『危険社会』1998、法政大学出版局、129－130頁。

¹⁵ 前掲ベック、78頁。

る危険の技術を容認し、からだを根底から破壊するという、転倒性が存在している。からだを破壊する技術と、破壊を感じ取れないからだとは、両輪となって理不尽な人間の死を許容しているといえる。

さらにベックの述べることで重要なのは、こうした技術による生命の自然基盤に対する脅威と破壊が、危険に関する知識の政治力学を支配してくるというところにある。本稿にひきつけていえば、戦争における殺人を含んだ状況までも「平和」ということばで彩る政治的手法が成り立つのは、まさに、生命の自然基盤を破壊する危険（例：テロの標的としての原発）をすべての人間にもたらし、権力者までもが危険から逃れられず、危険の分配の支配が政治的課題となるからだというのである¹⁶。危険の存在そのものは消せないで、自衛官等、誰かを犠牲にして権力者は自らの危険を少なくするしかないが、その正当性を確保するために「平和」の二重語法が生まれ、二重語法のごまかしに気づかないからだの形成が権力的に要請されるのである。

3. 女性史におけるからだの読解と平和

どうやら暴力を許容するからだの転換と、社会を成り立たせている技術の質の転換は、互いに深く関わっているようだ。では、私たちが少なからず感じているからだの違和感から、戦争を成立させるような技術の質を転換する思想の生成へとつないでいく道筋は、どのように描くことが出来るだろうか。森崎和江の思想はまさにそのような道筋を辿った。

森崎和江（1927－）は、1950年代の福岡県の炭鉱地域（中間）に谷川雁・上野英信らと住み込み、職場サークル間の交流誌『サークル村』（森崎は特に女性同士の『無名通信』）を公刊し、後年は、そこで得たいのちの価値を民衆の精神史のなかに読み解く旅を重ねる。なお、森崎の思想は性の問題を切り口とするが、女性の問題に限定されないこと、からだの問題を外界とのつながりのなかで捉えていることなど、ひらかれた女性史の発想であるところに特色がある。また、森崎和江の思想に対しては優れた先行研究が多数ある¹⁷。本稿ではそれらを批判する意図はないので、それらは森崎和江理解のために学ばせていただいた。

(1) 森崎和江の略年譜

本稿の課題意識に即して、森崎和江の思想の時期区分をしておく。第1期は、植民地朝鮮で朝鮮人の肉体労働の上で育ったがために、労働というものをうまく捉えられずに、その感覚を求めて福岡県の間中に移住するまでの時期（1927～1960）、第2期は、労働現場における肉体的矛盾の凝集点だった、大正闘争の強姦事件から、性の問題を通じて、自然固有の世界を思想的に切り開く時期（便

¹⁶ 「富める者も、権力を有する者も、危険の前に安全ではありえない」（前掲ベック、29頁）。「構造物に付随して生産される危険をどうしたら阻止し、無害とみせかけ、脱色し、誘導することができるのか」（24頁）が中心的課題になるという。

¹⁷ 水溜真由美『『サークル村』と森崎和江』2013、ナカニシヤ出版、などを参照。

宜上、著作『からゆきさん』まで。1961～1976)、第3期は、その自然の世界の論理から、現状の人間社会の技術のあり方を相対化し、人間社会におけるいのちの価値の復権を見通す時期(1976～現在)である。

表1 森崎和江の略年譜

出典：森崎和江・中島岳志『日本断層論』(2011、NHK 出版)より作成。本稿に関連する著作を加筆してある。

年号	事項
1927	慶尚北道大邱三笠町で、学校教師の日本人家庭に生まれる
1934	内地人のための鳳山町小学校に入学
1940	大邱公立高等女学校入学
1944	下関に渡海し、福岡県立女子専門学校を受験、保健科に入学
1945	9月初旬、家族が博多港に引き上げ、父の実家に身を寄せる
1947	45年ごろから続く体調不良・微熱が悪化し、6月より佐賀県中原の佐賀療養所に入所
1948	九州アララギ会誌『にぎたま』に短歌発表
1950	『母音』に詩「飛翔」が掲載される
1952	丸山豊・せき子夫婦の媒酌で松石始と結婚
1953	長女恵を夫の同席で出産
1954	谷川雁が『母音』を持参して訪ねてくる
1956	長男泉誕生。
1958	谷川雁、上野英信らと『サークル村』を創刊。遠賀郡中間町の九州採炭株式会社の医師宅兼診療所に谷川雁、上野英信・晴子家族と同居する
1959	上野夫妻が福岡市へ転居
1960	5月、『サークル村』終刊。谷川主導のもと、サークル村会員から組織された大正行動隊が大正炭鉱中鶴鉱業所の未払い賃金闘争に参加する。
1961	5月、大正行動隊の妹で『無名通信』のガリ版刷を手伝っていた女性が、炭鉱住宅で暴行のうえ殺害される。『まっくら 女坑夫からの聞き書き』理論社
1963	『非所有の所有 性と階級覚え書』現代思潮社
1965	『第三の性 はるかなるエロス』三一新書
1974	『奈落の神々 炭坑労働精神史』大和書房
1976	『からゆきさん』朝日新聞社
1981	『海路残照』朝日新聞社
1982	『湯かげんいかた』東京書籍
1983	『能登早春紀行』花曜社
1984	『津軽海峡を越えて』花曜社
1985	『悲しすぎて笑う 女座長筑紫美主子の半生』文芸春秋
1998	『いのち、響きあう』藤原書店
2001	『北上幻想 いのちの母国をさがす旅』岩波書店

以下、引用については、初出のみ書名、出版年、出版社、頁を示し、2回目以降は、書名と頁のみ記す。なお下線は、特に本文と関連する引用部を示すため、筆者がつけた。

(2) 第1期：植民地朝鮮で失った肉体労働の感覚

森崎和江は、植民地朝鮮で学校の教師をしていた父のもとに生まれる。小さい頃から身の回りに

肉体労働をする日本人は存在していなかった。森崎が植民地朝鮮で失ったのは、人間の暮らしを成り立たせるのには、肉体的な辛さを含んだ労働が必要だという体感であった。森崎は、その体感を取り戻すために、筑豊の炭鉱町に移住するのである。森崎は当時、その体感の喪失から肉体労働が「怖い」と感じていた。肉体を得体の知れないものと思わされる状況に置かれていたのだ。森崎は次のように述べている。

「わたしは日本に引き揚げて来たとき、汗に汚れて働いている人びとが、みな日本人だと聞かされひどいショックを受けていたのだ。一度にわが身の罪深さが照らし出された。あの人も日本人？と、幾度ひっそりと人に尋ね、わが心に確かめたことか。わたしは肉体労働をする人びとのそばを通るのがこわくてたまらなかった。道路工事をしているのが見えると道をかえた。筋肉を動かす人びとの心の動きが闇のようにかがいがい知れないのである。そのショックからなかなか立ち直れずにいたから、こうして炭鉱のある町に来て、まだ見ぬ組頭家族の工夫の跡に接するのは、直接会って闇に気圧されるよりはずっと落着いて卑屈にならずにその生活の心に近付けるかに思えた。」(『湯かげんいか』1982、東京書籍、30頁)

肉体労働のない植民地の生活がもたらしたものは、日本と朝鮮に住む人々の深い断絶であった。だとすれば、肉体労働の世界から、人間と人間とが連帯しあえる世界を模索していくほかなかった。しかし、その世界は一筋縄でその可能性を見つけだせる世界ではなかったのである。

(3) 第2期：強姦の衝撃と自然固有の世界の発見

①強姦の衝撃

森崎が移住した1960年前後の炭鉱は、エネルギー政策の転換によって、労使の対立が激化していた。大正行動隊とは、合理化で安全対策が軽視され大規模な事故も起こっていた中、大正炭鉱労働組合の若手を中心に自由参加でつくられた闘争組織だった。退職者の退職金獲得闘争などを実力行使で展開していった。

その行動隊員に、『無名通信』の発行を手伝ってくれていた女性が強姦される。単に労働者であるということだけで人間の解放を論じられなくなった。被害者の兄が、運動を主導していた森崎らへの抗議のように、森崎の自宅前の線路に飛び込み自殺する。自身の肉体労働理解の甘さが人間の死をもたらしかもしれないと感じた森崎は、ショックで起き上がることが出来なくなる(『日本断層論』130頁)。

犯人が仲間であったという矛盾から、森崎は、犯人が単に異常だったと片付けることが出来ずに、より深い人間存在の問題として受け止めていくことになる。その苦悩は簡単に整理できるものではないが、その苦悩が含まれた著作『非所有の所有』を見てみることにしよう。

②単なる倫理ではたたかえない予感―『非所有の所有』(1963)

この事件は、生活の根源的な部分から政治運動が離れていることを実感させた（「意識と生理との裂け目が視角を越える」(『非所有の所有』1963、現代思潮社、160 頁)。『非所有の所有』は、この事件に「渦巻く」ものを読み解く著作だった。

この渦巻くものの評価を敵に委ねずに、自分達の問題として読み解くことを獲得することにのみ闘争が成立する。社会規範から外れる行為が運動の内部で生じたときに、運動がそれまで敵対していた規範（警察権力等）と手を組んでしまい、支配者側の仲間入りを無意識のうちに果たすという矛盾をすでに森崎は気づいていた。森崎は、次のようなことばでそれを述べている。

「―鈴木個人をつまみだしても意味ないよ。何が何を殺したかということだから。掘りだした石炭のやまをけちらされたみたいに、何か無意識にわたしたちが積みあげていたものが切りくずされたんで、それをどう解釈していいかわからなくなってるんよ。資本主義的倫理に総ざらいされるよ」(『非所有の所有』171 頁)

「女房を鈴木のように誰もが抱いているでしょう。本質的に同じだと私は思っている。(中略) わたしたち（筆者注：労働者）が鈴木を裁くのであって、敵の論理で裁かせてこと終れりというわけにはいかんよ。彼と同質のものがわたしのなかにもあるし、あんたの中にもあるんだから」(『非所有の所有』172 頁)

「除名で片がつくの！労働者が労働者を殺したつばい。執行部は責任をとれ！」(『非所有の所有』173 頁)

この事件は、運動が「生活の根源」に入っていない、そういう問題としてあった。からだの生理のグロテスクな部分をみないで、平和や革命を語る抽象性の限界があらわれたといってもいいだろう。引用が続くが、森崎の表現を記しておこう。

「女の抱き方を知らん労働者は、本質に於て労働者をしめ殺しよる。それをかくして何が家族ぐるみね。やまの状況をみればなおのこと生活の根源から闘争へ入らないかん。やっちゃんの死はそのことを語っとるんよ。鈴木を裁くのは労働者でなからないかんやろが。」(『非所有の所有』175 頁)

「たたかうというけど、部分的にたたかって、生活の芯はどうなんかな。俺もわかっというわけじゃないが、どうしてもたたかいへ向ってしぼりきれん部分を、どうするか、ということは俺たちの最大の問題だからな」(『非所有の所有』178 頁)

③性からみえる、自然固有の世界―『第三の性』(1965)

森崎はこの事件から、性の問題を切り口に「生活の根源」へと向かっていく。性を売ることを社会的に強要された結果、性を無残なものとして内面化する悲慘が問題の入口となった。森崎は、こ

の権力的な構造に対抗するため、「産む」ことの感動を確信する自分（『第三の性』における沙枝¹⁸、「産んだ女」『第三の性』1965、引用は河出書房新社 1992 より、211 頁）を保ちつつ、性を売るなかで産むことを失った女性（同じく律子、「産めない女」『第三の性』211 頁）との譲れない対話をするという方法をとった著作を刊行する。性を肯定し得ない律子の抵抗を自分に課し、それでも性を肯定できる根拠はどこにあるのかを、対話を通して深めていく。

森崎は、性の問題を通じて、人間の意識と区別された、生きようとするからだの自律的な能動性に気がついていく。それは、労働者階級の社会の意味づけと資本家階級の社会の意味づけとのイデオロギー対立を超えて、いのちの存在そのものとそれも含んだ社会システムとの矛盾という視点を提供し、人間関係の対立（階級闘争）のみならず、自然固有の世界が存在し、社会システムと対立していることを可視化させた。その世界に真の抵抗の根拠があることを示していた。この固有の世界を開けたのは、意識とからだ（自然）との一致・不一致が、性の問題において鋭く可視化されたからである。人間の意識とからだの関係に限定して言えば、森崎は、からだの能動性（情欲）と意識が一致することを「自然への親和性」と呼び、意識がからだを抑圧することを「自然への加害性」と呼んだ。

「そしてだんだんとこんなふうを考えるようになったんです。わたしの感覚がとらえた男っぽいくあの洞>は、人間の意識作用がもっているところの、自然への加害性と背中合わせになっている自然への親和性ではないかしら、と。たとえ一人の存在を性の相手に選択したところで、その親和への基盤なしに男たちの精液を（人間の意識作用の及ばぬところまで）一定の秩序ある感動で、わたしの存在が迎えられる筈がない。」（『第三の性』39 頁）

「たとえばその一つですけどね。人類は性を対人間関係に求めなくなりますよ。非人間的な物体へ欲情する。そんなもの感覚内にとどめずに自らの性の対象を具象界に創造すればいいんです。（改行）それは自然へ対する人類の加害性—また自己自然へのそれ—の結果なのですけどね。（中略）人間の意志は自然界一般へ対する加害や加工を捨ててはできません。だからこそ文化は開発される。同じように自己の自然に対しても挑みます。生体の自律性をもまた意識下におこうとする。」（『第三の性』83 頁）

強姦は、その「自然への加害性」が社会的に媒介され他者への攻撃性として現象したものだったのである。だから、この「自然への加害性」が、他者への攻撃性に転化するかどうかを決める社会の質が問題化してくるのである。

性の問題は、人間存在の基盤にある自然という問題に接続した。だとすれば、女性だから平和をつくれるという「産む」ことを根拠にした女性限定の理解を超えて、「産めない女性」や男にも問題

¹⁸ 森崎和江と沙枝との重なりについては、前掲水溜、265 頁。

として普遍化されていく（『太陽の図ねえ。あの『むかしむかし女はお日さまでした』というのには、抵抗があるのですよ。女だけお日さまじゃしょうがないでしょ。』『第三の性』66－67頁）。

社会によって自らの性の尊厳を傷つけられた人間が、今度は自分からその性を卑下している、その矛盾と向き合うことはとても厳しい。そこに触れようとすれば、相手の拒絶や抵抗に必ず会う。しかし、森崎（沙枝）はそれが対話だと信じて接近を続けた。森崎がこの対話について述べたのが、次の文章である。

「非女群の被害感を圧迫し、その極点で加害へはねかえるのを待とうとするのです。手を取りあえる一点を作ろうと。そしてそのことで、わたしたちが、子を産まずとも心ゆたかに生きられる世の中をつくり出せるなら……。」（『第三の性』129頁）

「百姓の生まれでないから百姓の閉鎖は分からんとか、娼婦になれなかったから娼婦の苦痛にどう手だしもできんとか放言しあうだけではなんにも出てこない。それぞれの動かしがたい自己条件を、この世界的な閉鎖状況の破壊へ向けて押し出す力を共有しあう関係をつくりたい。」（『第三の性』131頁）

「女の固有性は、ながらく、ぼいされてきました。下層労働者の男たちも同じことがいえるでしょう。ぼいされたそれを取りかえしたい、個としても類としても。主体的に生きたいという思いがこりかたまつて惚れるという心情を染めている。」（『第三の性』179頁）

「手を取りあえる一点」とは何だったのか。それは、社会に被害を受け、さらに自らを卑下するという矛盾を抱えていたとしても失われぬ、生きることへの能動性だった。森崎は、社会の圧力がどれほど強くてもこの能動性が存在しているという、社会システムの矛盾を「存在の矛盾」（『第三の性』149頁）と呼んでいる。登場人物が二人とも病弱であったことは、そのことをより敏感に意識させた。

沙枝：「沙枝ちゃん、仕事はどうしてもできないことが生きているうちには何度もあるのよ。そんなときは、湯たんぽをいれて、体をあったかくして、ゆっくりと何日でもねてなさいよ」（『第三の性』9頁）
「律子さん、ただそこにいてくれるということだけで救いになる関係があるんです。分かってください。息ながく保ってください。」（改行）あなたにはまだ三、四回しか逢っていないけれど、こうして文字に遭うと、たくさんのものがみえてくる。なんという闊達な文字をかくものか。これが仰向けになってしるされたものか。あのあおくふくれていった指先で！（中略）律子さん、書かなくっていい、生きていてください。」（『第三の性』198－199頁）

彼女たちが対話を通して見出した価値は、ただそこに生きていること＝存在を尊ぶということだった。しかし、この対話のなかからは、存在が尊ばれる社会や暮らしの具体的な像は導き出せな

った。答えは見えないまま、『第三の性』の最後で律子は死んでしまう。律子の死について沙枝は次のように語っている。

「律子さんが死んだ。(改行) 死んでしまった。(改行) かきあげられた断髪のひたい。死を握りしめながら、わたしの混乱をみていてくれたひたい。(改行) わたしを裁断し、はねかえしてくれていた私の対極点。(改行) 見ることのできない彼方へもちさられた、産まなかった女の愛とたたかいをぼうぼうと焰の立ちあがるなかから、一辺の白骨として拾う。(改行) あなたの形しているこの白い骨。細く伸ばされている腕にかかえていたあなたの生。私は顔に焼きついてくる熱を受けながら、そのあなたの生を、こんなふうにくずしながら拾いあげ、つまみあげているのです。(改行) わたしは片目になってしまった。死でわたしを裁くなどとは。律子さん。みじめにさらされているではありませんか、わたしは。(改行) あなたの彼とはじめて遭い、そして二人ともうちのめされてあなたの無言を拾っています。わたしはどうすればいい・・・。」(『第三の性』204-205頁)

(4) 第3期：いのちの精神史と科学技術への警鐘

こうして森崎の課題は、生きること＝存在を尊ぶ社会とはどのような社会なのか、というところに至った。森崎の後年のいのちに関する旅の軌跡は、それを追求したものだったといえる。

①炭鉱労働の現場における、生きることへの能動性

性、そして自然固有の世界のリアリティからは、どんなに社会の圧力が強くても潰し得ない人間の生の力を可視化する余地が生まれた。森崎は、悲惨な炭鉱労働世界のなかに、それでも民衆が存在を尊ぶべく生み出した創造性を読み取っていくことになる。下記に森崎の表現を引用しておこう。ここにいのちに関する旅のはじまりをみることができる。

「そう思ってみれば、地下労働者ことに明治・大正期の坑夫は誰もが、百パーセントの被害意識の所有者というわけではなかった。むしろ私などには共感できない底抜けの開放性をもっていた。それは死でいろうどられた地下労働を知らぬ者には手のとどかぬ明朗さであった。おそろしいばかりの明るさを持った人びとだと、そんなふうに私たち地上暮らしの仲間は話し合ったりした。ゆきどまりを知らぬ抱擁力と同時に、微塵をも通さぬ拒絶を縊りあわせた精神の縄が、彼らの心底にある墓標をとりまいていくののように感じられる。」(『奈落の神々』1974、大和書房、6-7頁)

「次第に感じとってきたものは、私などの想像以上に炭坑には抗夫自身による、或る創造作業がたえまなく行われていたようだ、ということであった。それは水に溺れようとする者の必死のあがきにも似ていて、言語に絶する地下の労働現場で、地下に対する地上生活者の観念をくつがえしつつ人間の尊厳をたしかなものとして手にする作業であった。」(『奈落の神々』162頁)

②精神史における、豊かな人権像

森崎は、炭鉱労働の現場のみならず、多様な労働・生活の現場における人間の生きるための創造性を求めて旅に出る。そういう内容の含まれた伝承を求め、古老を訪ねる（「あたしね、普通の人の歴史が好きなの」『津軽海峡を越えて』1984、花曜社、95頁）。

例えば、福岡県鐘崎の海女の生活伝承では、現在の社会よりも、とても豊かに他者の存在を迎え入っていた地域社会の規範に出会う。

「仏さんを舟に引きあげるときは、ひとりが、『今からあんたを助けあげるけん、漁ばさせなさい』という。そうするとほかのもんが、仏になりかわって、『は一い、漁ばさせまっしょ』という。そして名はわからんけど、舟に引きあげてやるとたい。どうしてもあげられん時は、苦でも投げこんでやるとばい。それにすがって成仏するごと。（改行）そして無縁仏にせんで、拾い仏さんとして家にまつる。家の仏壇に拾い仏さんまつつとるところはいくらもあるばい」（改行）拾うということばはこのようにかがやかしい。それはよみがえりや復活に似ている。死者にその所を与え、生者とともに救われる。」（『海路残照』1994、朝日新聞、51－52頁）

『（前略）いまは警察にとどけて警察がしらべる。それでもわからんものはどげなるかね……。』『無縁仏でしょうね』『拾い仏さんにはせんとじゃろう』（改行）八十余歳の老人が砂浜で空を仰ぐ。』（『海路残照』53－54頁）

「『海女舟は沖に出るけん、いちいち昼めし食べに帰られんじゃろ、たいがい昼めしを舟に積んで行く。そしてめし食べる時、必ず一箸、海に投げるばい。ムネンボウカイさまにあげます、というて一口海にほうってから、食う。浜で食うときもそうする。ムネンボウカイは海でのうなつてまつりてのいない仏さんたい。無縁仏のことたい。」（『海路残照』54頁）

それは、植民地主義を相対化する根拠につながるものでもあった。単一民族神話など、国家によってつくられた地域共同体の閉鎖性は一面的であることが相対化されるからである。地域共同体が持っている他者に対する排除性は、アジア太平洋戦争でも経験され、そのただなかにいたのも森崎だった。森崎は、他者を尊重しようとした生活者の能動性を精神史のなかに発見していくことで、植民地主義をも相対化しようとした。

森崎は、生活者の能動性を探究する先に、地縁血縁（植民地主義における国等）とは区別された、生きるということに基づいた「地縁血縁ではないわが存在のふるさと」（『北上幻想』2001、岩波書店、21頁）が存在していることを発見する。そしてそれに基づいた地域の相互の存立が可能になることを見通した。森崎は、いのちの北上の旅が北上に至ったとき、秀吉の朝鮮出兵で犠牲になったという朝鮮と東北との共通性（「奥州仕置」：秀吉の天下統一の仕上げに当たる領地没収）で、朝鮮半島と北上川の岸辺の城主和賀氏、稗貫氏との連帯の根拠をみつけた。この北上の旅は、「日本にし

て大和あらざる」隙間、そこに存在のふるさとしての生活者の地域をみつけることで、植民地主義への抵抗の根拠を探し当てたのだった。

「それはともかく、この両神を祖として田畑を耕やし海や川で漁りをし山野で狩りをして栄えた荒吐族は、都びとよりもむしろ異国の入びとと交わり、それがためにか蝦夷とさげすまれ朝敵とのしられてきた。一族はいよいよ都びとをしりぞけ、朝廷と交わず武に励んでその軍門に降らないことにおいて、その誇りを保ってきた。その伝統は寒冷の地津軽にふかく、荒吐族の故地として、日本にして大和ではあらざるところとはなった。しかし、無残なことに、日本の歴史はわれらのことを、ただ征夷の的としてしか扱わなかった…」(『海路残照』217-218頁)。

③生活者からの科学技術批判

生活者の地域が互いの文化を尊重しながら存立する見通しは、自然への植民地主義をも相対化した。他地域の生活者の論理を無視したように、自然固有の法則性を無視するように発展する科学技術が植民地主義的に見えたからだ。

「人間の知的好奇心が科学技術を生んでまだ日が浅い。が、それは飛躍的な発展段階に入った。自然の摂理のままでは存在しない物質や生命もまた、第二の自然条件の様相をもってきている。(段落かえ) それでも私たちは知っている。文明の形而下の基盤は、人の自然としての肉体と、物質としての地球であることを。その有限性への挑戦に偏向するのは自滅だと。おくれさせながら有限性と知性とのバランスを模索してもいるのである。そして、それが次の時代へのよりよい贈りものであることも、承知している。」(『能登早春紀行』1983、花曜社、111頁)

「能登の外浦に原子力発電所の建設案が出ていると聞いた。土づくりとは関係なさそうにみえる。けれども自然の浄化作用にゆだねることが不可能な廃棄物が出る。(中略)(段落替え)それは生命科学が自然生殖を越えてしまったように、天然のままの自然と人間との関係が、文化の基盤であった時代が終ったことを告げるだろう。能登といえど時の流れと無縁ではない。それまで体験したことのない世界に足を踏みいれていくだろう。かつての規範では律しきれない自動作用が生存条件の一端に入りこんでいるのだから。」(『能登早春紀行』176頁)

なお、地域と技術の思想を踏まえて、森崎は重要なからだの見方を提示している。それはからだを、外界から分離した肉体として把握するのではなく外界(「物質としての地球」とのつながりのなかで把握することに加え、さらに思想を含んだトータルな「存在」と不可分のものとして把握する視点である。

「また、かつて日本人は出産に対しても、それを不浄視して禁忌した時期だけではなく、もっと自然な肯定的なとらえ方をしていた時があるのではあるまいか、近代化は産の禁忌をうすれさせたが、古代人が持っていた生命観を越えるほどの産みの思想はまだ持てないのではなかろうか、など話してみたくなったのだった。(中略)『生き方や考え方の近代化を全面否定する気は、あたし、ないんです。けれどその薄さをね、なんとかしたい、なんとかしなきゃ自分がつらいと思ったの、妊娠した時に』『妊産婦の保護意識は、てっていいいせんからね。ことに社会で活動している婦人はたいへんでしょ』『でもその方向には向かっていますでしょ。それはいいんですけどね、肉体保護では助からない気がしたの。みごもるっていうのを肯定するのは肉体のことではなくて、存在の次元だって、そんな感じがしたのね』(『海路残照』171-172頁)

森崎は、自然固有の世界から民衆の精神史の世界を切り拓くことができ、このような思想と不可分のからだの把握に至った。このような把握があつてこそ、からだの感覚と切り離された二重語法の「平和」の「薄さ」への批判が成立するといえよう。

(5) 小括―からだと平和の思想

からだの読解と技術の思想的転換との関連について、確認された論理をまとめておこう。

第一に、森崎の場合は、性の問題がからだのリアリティへの接近を可能にし、自然固有の世界という視点を切り開き、人間と自然との関係を考察の対象に含めることに成功した。それによっていのちの存在そのものの能動性が可視化され、社会の質を問い直す準拠点を形成した。

第二に、外界とのつながりのなかで捉えられたからだの思想は、政治的に引かれた地縁血縁の地域像とは区別された生活者としての諸地域の水平的な存立という方向性をしめし、その他者尊重の思想は自然に対しても貫徹され、科学技術の植民地主義をも暴露するに至った。

このようにして、人間も自然も含めた他者性の尊重としての平和が見通されていたといえる。このことは、意識による管理とは時に矛盾するからだや自然のリアルな能動性を直視するなかで生成し得たものだった。

4. 生のリアリティへーまとめにかえて

森崎から得た視点で見ると、現代の戦争を進めようとしている勢力は、意識・無意識に関わらず、からだを意識でコントロールする必要があるという社会の規範が浸透していることと、人間存在を規定する根源にはからだのリアリティがあるということの、世の中の二枚舌構造をととてもよく押さえているように見える。一方で、これまでの平和教育論は、もしかしたら、前者の規範の内部でしかそれを組織できていなかったかもしれない。

現在の情勢に関わって指摘しておいたほうがいいと思われるのは、ひとつには前者の規範の強化である。性に関する規制の強化は、人権を守る側面が大切なのは当然だが、同時にからだのリアリティの問題を個々人の意識に閉じ込めてしまう側面をもっていることにも注意が必要であろう。もう一つには、その一方で肉体への社会的介入の強化がある。アジア太平洋戦争へかけての日本の全体主義が肉体の強化へ介入していたのは歴史的事実であるが¹⁹、昨今の肉体の美化・強化の推奨、それに迎合する食やファッション、あるいは健康への宣伝の強化は、戦争とのかかわりで留意されるべきことであろう。ただし、戦争ロボットが用いられる現代に固有の、肉体と戦争との関連論理については今後の課題である。性の世界に関わる事柄による戦争への誘導が存在すると同時に、性の世界の事柄に対する規制の強化によって性の世界での自由な言論を封じること、結果的に、戦争へのラディカルな批判が封じられる構図がつくられつつある可能性を一度考えてみなくてはならない。

肉体の綺麗さが権力的に強調される一方で、食（屠畜を含む）や排泄といったからだのリアリティは、肉体への権力的介入・画一化への抵抗となりうる。それは、個々人の肉体に問題を還元せず、文化的多様性を持った地域の創造へも開かれている。それぞれの地域の生活文化に固有な、自然との関わり方も意識できるからである。

このように捉えれば、他者性尊重の価値の獲得を重要な任務とする平和学習・教育において、リアリティのあるからだ²⁰をその内容にいかを含めることができるかが重要な課題となっているといえるだろう。

¹⁹ 例えば、入江克己「日本ファシズム体育思想の研究(I)」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』2009。

²⁰ 「グロテスク・リアリズム」ミハイール・バフチン著、川端香男里訳『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』1990、せりか書房、278頁。